

今年の一編の応募作品は高校生の応募1編を含む3編。ジュニアの応募作品は、小学生1編、中学生6編、高校生2編だった。

一般の部の1席は「浮かんで沈む泡沫」の薄暗い牢の中で鎖につながら、胸に痛みのある穴が開いているあたしと、そのあたしを見張る牢番、入れ違いに現れる痛みを和らげてくれる美しい毛並みの一匹の豹。私は2年前から何度と同じそんな不可解な夢を見るようになる。私には2年前からの恋人テルがいるが、彼には奥さんがいて、写真で見るとその彼女の美しさには、どこか懐かしさを感じ、私の中の何かは疼いていた。私が中学2年の時にクラスに美しい転校生が現れ親しくなるが、あたしの胸の奥に疼く気持ちを残したまま、すぐに転校していった、彼女。不可解な夢は、私の中に疼く何かと、その中学2年の過去に関係しているのか。不可解な夢と現実をうまく交差させて、私の奥底に潜む感情を徐々に浮かび上がらせ、真相に近づけていく。物語の中へ引きずり込む構成と文章力が感じられた作品だった。

2席には「シンメトリー・アシンメトリー」姉、押澤みずきは俳優、妹の私はそのマネージャー、二つ違いの姉妹は双子の様にそっくりな顔立ちで、後ろ姿も瓜二つ、声まで似ていた。姉は誰にも言えない結婚をした。結婚したのは左右対称の「董」という文字。それは二人だけの秘密になった。私は、姉の代役としてコマダシヤル撮影に出演、いつものように押澤みずきに成りきる。私は、その時共演した俳優に抱く。その後、役を演じるドラマの撮影は姉が行った。姉はコマダシヤルで共演した俳優に言い寄られ、断る代役を私に頼んできたが、俳優の前で、私の心の中は姉にも押澤みずきにもなれなかつた。どんなに成りきったとしても、自分自身の感情は変えられないことをしっかつた。3席は「ひなたの人」自由奔放で自分に正直に生きてきた大叔母と同居していた私は距離を置いていた。私は今も昔もGIDだ。大学を卒業したが不景気で就職できない、やがて食品加工工場に就職するが、1年で退職する。そんな時、年若い大叔母が竹籠を作る職人だったことを知り、自分を何かの職人になりたいと願っていたことを思い出す。大叔母から佐賀錦を勧められ、織り手になっていく。物づくりを通して大叔母と私の関係は親しくなり、私が織って大叔母がアクセサリーを作り、誰かに喜んでもらい、二人で喜ぶ。しかし、そんな生活も途切れ、一人遣されることになる。大叔母をひなた、私を日陰にたとえて、大叔母に支えられながら生きていく私が精神的に成長していく姿と佐賀錦の織り手の存在や織りあがる工程が丁寧に書かれていて、好感を持てた。

0 回記念特別賞に「檻」。秀作に「ブルーベリー」と「父さんがゲイだった。」が選ばれた。質問と